

No.7	踏み出し		
氏名	川上 友聖	産業社会学部	1回生

1. 出願時のテーマ・目標を具体的に記述してください。

【テーマ】
 北欧と日本での主権者教育事例を調査し、日本で実現と推進が可能な主権者教育モデルの考察をする。

【内容】
 1つ目：日本国内で行われている主権者教育の先行事例の調査。現在日本国内では「主権者教育」自体がマイナーであり、あまり取り組まれていない。しかし、全国的に見た際に取り組まれている先行事例が幾つかあり、その事例で実際に取り組まれた方、参加した方を対象に調査を行う。そこから日本で推進が可能な主権者教育モデルを考察する。
 2つ目：北欧での主権者教育事例の調査。北欧（特にスウェーデン）は世界的に見た際に主権者教育先進国である。私はそこでの事例を勉強すると共に、現場で取り組まれている方に調査を行う。それらを踏まえて、現在日本で取り組まれている主権者教育との相違点を見出し、日本での新たな主権者教育モデルの考察を行う。
 3つ目：日本の教育の現場への実情の調査。これは私が考える主権者教育モデルの実現を目指すために、現場の教員の方や主権者教育に携わる団体の方に調査をする。この調査で日本の教育現場での問題や懸念点を可視化したい。そして、日本でより現実的に実現が可能で主権者教育モデルを考察する。

2. 上述のテーマ・目標を実現するために実施した計画を具体的に記述してください。

①2020年4月～6月（1200文字以内）
 この3ヶ月間では、「日本国内での主権者教育事例の調査」を中心におこなった。NPO法人Mielkaや学生団体ivote、特定非営利法人こどもNPOシビックスクール、日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）をはじめとする実践を行なっている方との意見交換を行った。加えて、関連書籍を購入し、学びを深めることができた。

↑

②2020年7月～9月（1200文字以内）
 この3ヶ月では、「北欧での主権者教育事例の調査」と「学校現場における主権者教育の実情の調査」を中心におこなった。前者については、『『政治について話そう！』翻訳プロジェクト』やSoren Kromannさん、両角達平さんなどの方に北欧での主権者教育についてのインタビューを行った。また、関連書籍の購読をおこない翻訳された書籍を中心に多くの事例を学んだ。後者については計30名以上の中学・高校の先生方と意見交換を行った。この際に主権者教育で身につけるべき素養は何なのかを議論した。

③2020年10月～12月（1200文字以内）
 この3ヶ月では、「学校現場における主権者教育と探究型学習の実情の調査」を中心におこなった。7月～9月において自己肯定感と自己有用感というキーワードを知ったことから主権者教育だけでなく、探究型学習についても意見交換を行った。またオンライン上で高校生に対して講演する機会が2度あり、主権者教育について話をした。

5. 今回（今年度）の取り組みについて、今後の活動展開と展望を記述してください。

今後の活動展開としては、探究型学習の研究と実践を通して、自己肯定感と自己有用感を育む教育を学んでいこうと考えている。
 今年取り組んでいく中で、私は主権者教育を通してどのような力を高校生に身につけさせたいのかを常に考えてきた。その中で、自己有用感を身に付けさせ、政治的有効性感覚を持って政治という手段を誰しもがうまく活用できるという状態であると考えた。しかし、高校の見学や先生との意見交換を通して、現場では政治的有効性感覚は愚か、自己有用感と自己肯定感の低さという課題があることがわかった。更には、それらの力を身につけるためには自己理解と自己表現が必要であるということがわかった。このことから自己理解と自己表現を身につける学習を通して、自己肯定感と自己有用感を育む教育について特に注目して学んだ。そして、探究型学習というものに着目した。探究型学習では自己内省を通して問いを見つけ、その問いの解決を行うために自己表現を行うというものだ。このことから来年度以降は、私は自己肯定感と自己有用感を育むために探究型学習によってどのように育成することができ、どう教材として実現するかについての研究を行なおうと考えている。
 今後の活動展開としては、実践と研究を行う予定だ。実践については、千葉県にある私立中高一貫校である昭和学院高等学校において、探究型学習の教材開発に関わることになっている。そのため、実際に生徒に使っていただく教材を作成し、試行錯誤を通して、どうすれば自己肯定感と自己有用感を身につけることができるのかについて追求したい。研究については、実践を行う昭和学院高校に配属されている研究者の方と共に研究活動を行う。加えて、立命館大学に在籍されている蒲生諒太先生の元で学んでいきたいと考えている。

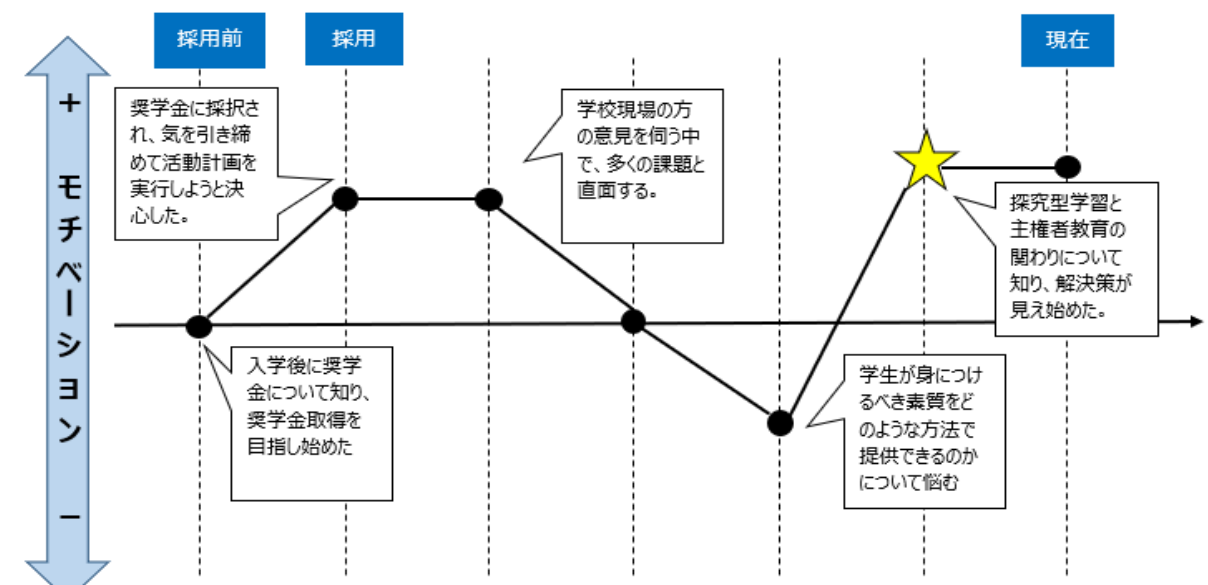
6. 今回（今年度）の取り組みは、今後の学びや進路にどのように影響しますか。

今年度の取り組みによって、新しい視野を持つことが出来たという意味で大きな影響があった。
 今まで若者の政治参画という文脈から政治的有効性感覚の低さに注目し、主権者教育について学んできた。しかし、今回の取り組みを通して活動自体に深く向かうことができ、無座政治的有効性感覚を上げなければならないのか？なぜ有効性感覚が育たないのか？などの問いを自ら立て、それに対する答えを追求することができた。そのため今後の活動の目的と手段を改めて考え直すことができ、自分のやりたいことをより明確化することが出来たため、大きな影響があった。

7. 今回（今年度）の活動が周囲に与えた影響（社会・周囲）への貢献・還元の点で記述してください。

今回の活動の影響については大きく2点あると考える。
 1点目は、情報発信という点だ。今回の主権者教育の研究内容をメディアに取り上げていただいたり、自身のSNSでの発信活動を行なった。このことから多くの学生と主権者教育について議論する機会ができた。そのため主権者教育の重要性や必要性について多くの方に知って頂けた。
 2点目は、意見交換を通じた実践という点だ。主権者教育について学んだことを様々な高等学校の先生方と意見交換を通して学びを深め合うことができた。主権者教育がまだメジャーではないということから主権者教育について先生方から教えて欲しいという依頼をおいただき、実践についてのアドバイスも行なった。

3. 個人の成長の軌跡3-1. 取り組みの過程でどのようなことがあったのか、グラフを作成してください。



3-2. グラフで書いた☆（個人がもっとも成長したと思うポイント）では、その過程で学んだこと、気づいたことについて具体的に書いてください。

【学んだこと】
 自分の目指すビジョンのために今までの自分の活動に囚われることなく、活動計画や活動内容を変えることは必要だということ。
 主権者教育で私の目指すビジョンを実現しなければならないと思いついたが、それ以外の手段で実現する小売が可能であれば、方向転換することも重要だということを知った。
 【気づいたこと】
 多くの人に支えられて活動を行うことが出来るということ。
 活動で行き詰った時に多くの人に相談に乗っていただき、親身になって一緒に活動について考えてくれた。

3-3. “今回（今年度）の取り組み”と“正課の学びや取り組み”は、どのような関連や影響（相互作用）がありましたか？

私は「日本の中学・高等学校における主権者教育」をテーマに活動を行なった。その活動の中で正課の授業では「地域参加学習入門」と「現代教育社会論」が特に影響を受けた。前者の授業では、一個人としてどのように地域に関わっていくか、どのようなマインドセットでどのような関わり方をするかについて学ぶことができた。私は中学・高等学校の所在する地域をフィールドにどのような主権者教育が実現可能かについて実践をとおして学びを深めることができた。後者の授業では、特に教育の自由と平等の違いとメリット、デメリットについて学ぶことができた。主権者教育は教育の自由が尊重される一方で、平等における観点が増えているということを知ることが出来た。また授業外では、蒲生諒太先生と定期的に意見交換を行うことができ、自身の活動に生かすことができた。

4. 本奨学金を受給したことで、以下の項目についてどのような影響を与えたか5段階で評価してください。（該当ナンバーに○）
 また、併せて評価の理由も書いてください。評価例：【 1（達成できなかった） ← 3（どちらともいえない） → 5（達成できた） 】

① 目標の達成度	3
<理由> 当初予定していた主権者教育の教材開発まで実現することはできなかったが、主権者教育に対する知識を深められ、新たな手段も見出すことが出来たから。	
② 計画の達成度	3
<理由> 上記同様に当初の目標を達成するまでの計画を実行することはできなかったが、基本的には自分自身の計画に則って活動することができた。	
③ 取り組みを通じた自己成長	4
<理由> コロナ禍の活動ということも相まって、壁にぶつかることが多々あったが乗り越えることが出来たから。	
10. 今年度の取り組みを通じて最も身についたと思う力について、具体的に記載してください。9の設問で回答した力でも、それ以外でも構いません。	
① 身についた力	
目標設定力	
② ①で記述した力について具体的に説明してください	
奨学金応募時に提出した活動計画から変更した点やコロナ禍によって断念せざるを得なくなった事が多々あったが、その度に目標設定と活動計画を立て直すことが出来た。	
③ なぜその力を身につけることが出来たのか、成長を手助け・促進させた要因を記載してください	
要因としては、2点ある。1点目は金銭的な余裕があったからだ。高校生の際にも同様の活動を行っていたが、金銭的な余裕がなかったため、計画を断念した場合再設計することが難しかった。2点目は最初に計画を作成していたからだ。当初に計画を立てていたことから再設計することができ、目標に向かって活動することができた。	